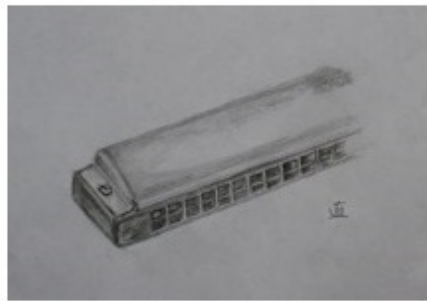


# 私とハーモニカ



夏炉冬扇

ハーモニカは、いまから70年あまりも前、およそ音楽というものにはこれっぽっちの縁もない我が家の、古箏の抽斗に転がっていた唯一の楽器である。誰が使っていたのかもわからない古びたそれを吹いてみると、ずいぶんと濁った音ながら一応音階の区別は生きていた。亡くなった姉がたどたどしく吹いてくれたのは辛(かる)うじて「白地に赤く 日の丸染めて あ〜美しい日本の旗は」だとわかるメロディーであった。ふたりで笑い転げながらかわるがわる吹いてみたけれど、曲目の判断もできかねるようなもので、すぐにあきらめて抛り出してしまっていて以来、それを手にすることもなかった。

私たちの小学生時代は、特別な家庭はともかく、農家の親にとって音楽は、閑人の道楽程度にしか理解されておらず、その機嫌が悪いときに歌など歌おうものなら「うるさい！」という一喝と同時に、拳(げん)骨(こつ)のひとつも食らわされたものであった。また当時、学校における音楽教育も、まことに粗末のかぎり、ピアノについて歌えさえすればよかったのではなかったかといま思うのだ。

低学年の唱歌学習を評価される上ではまず国歌、ついでに祝日に歌わされた皇室賛美の式典歌。これが歌えないと致命的な赤点をいただく。唱歌の教師からその連絡を受けた担任の男性教師からは、サザエのような拳骨のオマケがくる。まあそんな程度で、楽譜の意味も必要性も読み方も口々に教えてくれなかったし、それを読めるかどうかなど、一度も課題とされたことがない。さらに、小学校を卒業する前年の12月には太平洋戦争が始まって、日本国中戦争一色となり、軍歌が幅をきかせてそれまでの唱歌教育などは片隅へ追いやられてしまった。

一方、小学生時代、私は記憶力では誰にも負けなかった。学年の前後期に配布される国定教科書でも、国語など一読するだけで句読点まで丸暗記することができた。もちろん、これから習う漢字まじりなのだが、私は姉が使った教科書で先走りしていたから、読めない字はなかった。唱歌も同様で、先生がピアノを弾きながら私たちに向かって一度歌って聞かせてくださるだけで、そのまま覚えてしまっていたから、なぜ楽譜というヘンなものが必要なかわからなかった。

教科書を開くと、左右どちらかのページに歌詞と楽譜が載っていた。周囲を見回すと、同級生のなかには楽譜のページを見ながら歌っている者もいたが、彼らは、なぜあんなものを見なければ歌えないんだろうと不思議でならなかった。唱歌の実技など私にとっては朝飯前で、歌詞もメロディーも目をつむっていてもごく自然に唇から出たのだ。この認識が、音楽学習の上でいかに致命的であるかなど思いもよらなかった。要するに私は、まともな音楽教育を受けることなく成人し、音楽とは流行歌のことくらいの認識しかもたず、それでもとりわけ日常生活に不便もないまま、呑気に日を送ってきたのだ。

その私にハーモニカの上手な小学校時代の友人がいた。戦後、ときどき私の家へ遊びに来ては巧みな節回しで流行歌を吹いて聞かせてくれたのだが、私はそれに強く惹(ひ)かれた。

「オレもハーモニカを吹きたい」

という思いが募(つ)のり、前述の古ぼけたハーモニカの埃(ほこり)を払って吹いてみた。確かに音

は出る。そして位置をかえれば音階が変わる。だがそれだけのことでメロディーらしきものにはならない。それでも、私の記憶にあったドレミファソラシドの音階をさぐり探(さぐ)りしながら吹いているうちに、その位置を唇が覚えるようになった。

私は、これをつなぎ合わせれば曲になるんだと思い、知っている歌のメロディーを探りながら吹き続けてみた。ひとつひとつの音階の位置を覚えながらそれをつなぎ合わせるのだ。なんとしてもハーモニカを吹きたいという一心で、白地に赤くやもしもしカメよなどをやっているうちに、吹こうとしている曲目が聞いている人にわかる程度になってきた。

一心ほどおそろしいものはない。どうにかこうにか曲りなりに吹けるようになってきたころ、前述の友人に

「お前のハーモニカの持ち方は逆や」

と指摘され、私はびっくりした。

「そんなモン、どっちでもエエンと違うんかい？右でも左でも節(ふし)になりさえすりゃ・・・」

とはいつてみたものの、折角築き上げてきた学習効果を全否定されたみたいで、頭の中が真っ白になった。

「それにしてもお前、殺生やで。なんでもっと早ように言うてくれへんねん」

実際、こうなるともう最初からの再学習はできない。それは最初の学習より何倍も何十倍もむつかしい。結局私は逆の持ち方のまま練習を続けることにした。

次の問題は楽譜である。5線譜にあるオタマジヤクシが音階を指し示しているものだとわかるが、それをつなぎ合わせて曲を調べるなんてことは、私には逆立ちしてもできるとは思えない。頭から不可能という観念がつきまとう。これを克服するためには、メロディーを丸暗記してしまうことだと思い、片っ端から流行歌を覚えた。覚えた歌をハーモニカで吹く。これを行っているうちに知っている歌ならどうにかこうにか吹けるようになってきた。新しいハーモニカも買った。

いまと違って、周囲は田んぼばかり。少々下手くそでも気にならなかった。それどころか、曲がりなりに曲目を判別できる程度に吹けるだけでも、たいしたものという評価をいただけたのだ。そして、私のハーモニカの持ち方が逆だなんてことに気がつく者など一人もいない。気楽なものである。

「オレは別にハーモニカを吹いて飯のタネにしようというわけじゃなし。持ち方なんてどうでもいいんじゃ」

と独り決めしていろいろな歌を吹いているうちに、やはりエライもので知っている歌ならだいたいのところは吹けるようになってきた。だがまだベースを入れることができない。これでは一人前とは言えない。そこでまた、前述の友人に教わってそれを入れる練習をはじめた。

これまでの苦労に較べれば、これは簡単であった。しかも、これを入れながらの吹奏は、それまでのものとはひと味もふた味も違って、かなり聞きばえがよくなってきた。褒(ほ)めてくれる人もでてきた。夏、夕涼みをしながら吹いていると、若い娘さんがあれこれとリクエストをして、ウツトリと聞き惚れてくれるようになった。多分、いまと違って、誰もが音楽に飢えていたのだ

ろう。

ざっとこんな過程を経て、私のハーモニカができあがったのである。でも、以上の事情や経過を知ってくれている人ならともかく、全く知らない人の前で吹奏する度胸は、まだまだとてもじゃないがなかった。

2001年の暮れ、地元の自治会長を務めていた私は、21世紀という節目に合わせて、なにかの行事を立ち上げたいと思った。幸い後輩のひとりが賛同してくれた。そしてその年の大晦日に、第1回岡山年末カウントダウンを実行することになり、そのイベントに集まった人たちと一緒に、「蛍の光」を合唱することを企画した。そしてそれには、私がハーモニカで伴奏するという事になった。

まさに艱(かん)難(なん)辛(しん)苦(く)50年。ついに私のハーモニカを世に問うときがきたのだ。

評判は上々であった。ただし、お素人さんばかりの集まりの場で、自治会長が吹奏すれば、気がついていても悪く言う人はいないのが相場というものだろう。その2～3年後、このイベントでの私のハーモニカは、それまでから地域で活動されていた女性コーラスグループの熱唱に交代をお願いすることになった。そのためその後数年、私のハーモニカが世に出ることはなかったのだが、ただ、私がそれを吹けるという噂だけは、いつしかかなりの尾(お)鰭(ひれ)つきでひとり歩きを始めていたらしい。

そして4年ほど前、地域にあるデイサービスセンターから、この土地の来し方・行く末を語るボランティアを頼まれて語り部を務めるうちに、私のハーモニカに合わせて童謡を歌うという企画が取り上げられたため、再び出番がめぐってきたのである。

利用者は、ほとんどが高齢者で、女性が多い。その人たちと一緒に、季節に見合う童謡や、戦後まもなくにはやった歌謡曲などを吹いて楽しい時間を過ごすのである。相変わらずの下手くそも気にならない。終わるとみなさんが盛大に拍手をしてくださる。いい気になって続いていたところ、一昨年5月。先述のコーラスグループを指導しておられる先生が訪ねてこられた。お話しはこうである。

来月、その先生が指導されている女性コーラスグループ2組が、合同でコンサートを開くことになった。その最後に、みんなで唄いましょうというコーナーがあって、参加者全員で坂本九ちゃんの「上も向いて歩こう」を唄う。そのときに、口笛の部分をハーモニカで吹いてほしい・・・というわけ。

「エーッ」

と思わず絶句したが、そのセンセイ、ひとりでまくし立てたあと、言葉を失っている私に

「じゃ、頼みましたわよ」

と言い捨ててサッサと帰ってしまわれた。

さあーえらいことになってきたわい。お体が不自由で、デーサービスを受けながら1日の時間をもてあましておられるお年寄りなればこそ、私のハーモニカでも暇つぶしに聴いてくださるのだし、拍手もしてくださるのだけれど、今度の話は相手が違う。たとえ素人集団とはいえ、コーラスグループを結成して、練習を積んでおられる人たちの歌に私が伴奏するなんて・・・し

かも、大々的に宣伝して大勢の人たちが聴きに來るといふ。いくらなんでもこれは心臓に悪い。辞退するに如(し)かずとは思ふのだが、あのセンセイにまくしたてられたら、私の辞退の弁などきつと一蹴されるに違いない。どうしよう、どうしようと悩んでいるうちに、当のセンセイが「プログラムができました～」

と言つて届けられたそれを見れば、私の名前もすでに印刷されてしまつてゐるではないか。まさに相撲でいふ、電車道の押し出しでアツという間に勝負はついた。

かくして、私のデビュー(!)が確定した。

プログラムによれば、私の演目は「上を向いて歩こう」と「ふるさと」となつてゐる。少し最初の話が膨(ふく)れあがつてゐるみたいだが、もうここまで來れば五十歩百歩。どうせまともに吹ける筈もなし。度胸を決めてやつてやろうじゃないかとなつた。

コンサート当日、自治会館の大集会室は満員の聴衆で埋まつたが、ありがたいことに殆どが顔見知りで、満場和氣藹々(わきあいあい)のうちになんとか吹奏を終え、拍手大喝采(かっさい)をいただくことができた。大爆笑のおまけもいただいた。

さらに昨年(しご)の6月、おなじコンサートがあり、一昨年と同様ハーモニカの伴奏を務めたのだが、もちろん進歩向上などあるはずもなく、大汗をかきながらも開き直つて出演した次第であつた。

でも考えてみれば、これまで何ひとつ取り柄のなかつた私が、前述のセンセイをはじめ、たくさんの人たちの後押しや煽(おだ)てのおかげで、唯一の特技を得たことに、私は心から感謝してゐるのである。その特技。なにしろ楽譜が読めないという致命的な欠陥を抱えている以上、いまより上達することは望むべくもないが、それでも聴いてくださる方がある以上は続けていこうと思つてゐる。そして、それが地域の皆さんのコミュニケーションを深めるうゑに少しでもお役に立つことができれば、これにまさる喜びはない。

いま私は、今年6月、白夜の季節に知床半島へ行く計画をしてゐる。そこには、全国各地から多くの観光客が訪れてゐるに違いない。その人たちに呼びかけて、私のハーモニカ伴奏で「知床旅情」の大合唱をやりたいと考えてゐる。

実は、これにはもうひとつ別の感懐を秘めてゐるのだ。

知床の地は、今の私が足を伸ばし得る最北端であろうが、ここから更に東北東、遙か2,000kmの彼方を望めば、アリューシャンの海に浮かぶアツツ島があるのだ。この島は、私たちの年代にとって忘れることのできない悲劇の島なのである。この島に無念の涙を呑んで眠る2,600余柱の英霊に、私は鎮魂の祈りを捧げたい。

昭和18年5月12日、この島を守る2,600の日本軍に対して、強力な艦砲射撃の援護のもと、11,000の米軍が襲いかかつてきた。そして20日間にわたる死闘の末、山崎部隊長以下全員が玉碎を遂げたのである。これは、太平洋戦争史上初めての玉碎であつた。

戦史をひもとけば、当時日本の大本営は、1発の弾丸を補給することもなく、アツツ島守備隊の救出を断念した。(以下資料は、児島襄氏著 太平洋戦争 下巻 による)

5月29日、山崎大佐は、僅か150名の残存兵力を率いて、最後の夜襲を決行する旨を北方軍司令官あてに打電した。これに対する参謀本部の返電は

「今や最後の関頭に立ち、毅然たる決意と堂々たる部署の報に接し、合掌して感謝す……必ずや諸子の仇を復し、屈敵に邁進せん」というもので、事実上見殺しの通告に等しい。

山崎大佐は、同夜9時15分「機密書類全部焼却、これにて無線機破壊処分す」との連絡をしたのち最後の突撃を敢行、30日午後に至るまで死闘の末玉砕を遂げた。

戦死者 2,638柱、生還者 27名（重傷を負い、戦闘はもとより、自決する余力も喪って捕らわれた）。

文字通りの全滅であった。

当時私はまだ中学2年生であった。しかし、これに先立つ4月18日、連合艦隊司令長官 山本五十六大將戦死の報に、全国民が深刻な衝撃を受けた直後である。その傷も癒えぬ間に聞かされた悲報に私は、子供心ながらも悲痛の思いを禁じ得なかった。そしてこれ以後、太平洋戦争は攻守ところをかえ、日本軍の敗退に転じたのである。

極寒の孤島に悲涙を呑んだ2,600余柱の英霊に対し、私はこの企画に鎮魂の思いをこめたい。二度と訪れることはないと思われる北端の地から、さらに遙かなる絶海の孤島に眠る英霊を弔うことは、私にとってもひとつの区切りとなるであろう。

平成25年3月

#### アツツ島玉砕の歌

- 1, 刃(やいば)も凍る北海の 御(み)楯(たて)と立ちて二千余士  
精鋭こぞるアツツ島 山崎大佐指揮を執(と)る  
山崎大佐指揮を執る
- 2, 時これ5月12日 暁こむる霧ふかく  
突如と襲う敵二万 南に迎え北に撃つ  
南に迎え北に撃つ (以下略)

#### 著者プロフィール

本 名 上邨光弘

現住所 大阪府四條畷市岡山1-3-6

昭和 5年 (1930) 現住所に生まれる (83歳)

同 25年 大阪府に奉職

同 33年 結婚・1男1女 孫(男)5人

同 39年 退職・自営

平成11年 岡山自治会会長

同 17年 退任

同 21年 3月より、ディーサービスセンター 「ふるさと」において地域の語り部としてボランティアを務める